

# ふくしまの 今

原発事故以降、出漁の自粛が続いてきた福島県沖で、昨年6月に試験操業が始まりました。厳重な検査体制の下で、少しずつ市場への出荷も始まっています。



## 試験操業を続けて 地道に放射能の確認を

福島県沖は黒潮と親潮がぶつかる好漁場。相双地域では、陸から比較的近い海域で行われる沿岸漁業が盛んで、カレイ類やヒラメなどが高値で取引されています。

原釜機船底曳船頭会長の松本浩一さんは、漁師歴43年。「たくさんの魚が網にかかった時のうれしさは、何ともいえないものだったなあ。相馬の魚はうまいし、全国的にも自慢できるも

のだった」と振り返ります。

にぎやかだった港は原発事故以降、すっかり静かになってしまいました。22艘の底曳船も、週に1回ペースの試験操業以外は港に停泊し

たままです。「消費者に安心して食べてもらえるようになるまでは、我々も本格的に漁に出るのを我慢するほかない。地道に試験操業を続けて、放射線量を

原釜機船底曳船頭会長 ● 松本浩一さん (相馬市)

本当に安全で、おいしい魚を  
消費者に届けられるように――



(上) 着実に進んでいる松川浦周辺の復興。整然と並ぶ船が本格的な漁業再開を待っています。

(右)「全てのことに必ず表と裏がある。豊かな海の“怖さ”に、人はいつでも思いを至らせないとイケないよね」と松本浩一さん



# 絆つないで

原発事故により、福島市飯野町に移転している飯館村立飯館中学校。震災後に岐阜県各務原市立中央中学校より支援を受けたことから交流を深めています。

飯館村立飯館中学校 [福島市飯野町]

☎024-573-1161



▲布を切り貼りしながら旗を作る生徒たち。



▲生徒一人一人が心を込めて作った校歌旗。

## 震災後にできた、新たな友達。 県境を越えて深まる絆。

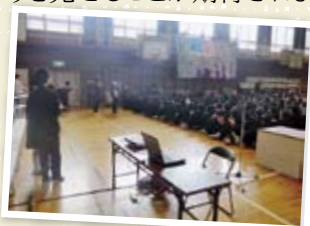
飯館村立飯館中学校と岐阜県各務原市立中央中学校の交流は、昨年2月に中央中学校からパソコンが贈られたことをきっかけにスタート。昨年8月に行われた飯館中学校の新校舎への引越しでは、中央中学校から生徒や教師、保護者らが手伝いに駆けつけてくれました。現在は、「テレビ会議」や両校の校歌を合唱した「合唱交流会」などで親交を深め、生徒同士の交流が広がっています。生徒会顧問の宮澤裕介先生は「生徒たちは感謝の思いとともに、交流を通して明るくなり、積極的になった」と話します。

2月15日(金)には、飯館中学校で中央中学校の校歌を記した旗の制作が行われました。これは、福島県と東京都などの共催で、アーティストの日比野克彦さんによる「マッチフラッグ・プロジェクト」の一環。今回は、両校の絆を深めるため、お互いに校歌旗を作り交換することになりました。飯館中学校の生徒約70名が、中央中学校の皆さんを思いながら、青や赤色の布で歌詞を一字ずつ丁寧に仕上げていました。飯館村の自然をイメージした樹木や花、動物を文字にするなど趣向を凝らし、カラフルな旗が完成。生徒会で2年生の菅野風希さんと巻野凌さんは「これまで以上に中央中学校のみんなとつながっている感じがした。楽しかった!」と笑顔を見せました。

飯館中学校には、中央中学校の生徒らが作成した校歌旗が飾ってあります。離れた場所からお互いを思い、絆を育んできた両校。その交流が生徒たちの笑顔とともに、ますます広がりを見せることが期待されます。



▲テレビ会議で校歌を披露した「合唱交流会」。



▲2月22日に岐阜県各務原市立中央中学校を訪問し、旗を交換。



▲生徒会顧問の宮澤裕介先生(右)と、生徒会の菅野風希さん(中央)と巻野凌さん(左)

確かめるしかないんだと思う」と松本さん。  
松本さんも大震災の津波で家を失いました。陸に打ち上げられた船を見つめようやく修理に出しても、思うように漁に出られない日々が続きます。それでも今は「くよくよしても仕方ない」と受け止めています。  
「漁師には今日は捕れなくても、きっと明日は大丈夫という望みがある。自分はずっとそう思って海で暮らしてきたからね。だからこそ、その日その日を大事に生きないと」。

大きな壁を乗り越え  
次の世代に漁の技術を

試験操業で水揚げされているのは、放射性物質の数値が特に低く、ほとんどが「不検出」となっているタコやツブ貝など。当初の3種類から徐々に増やして、現在は13種類となりました。漁協に整備した放射性物質測定器とあわせて、県水産試験場でも適宜モニタリング検査を行い、安全性が確保されたものだけが出荷されています。事前検査で高い数値が出た魚種は、一切水揚げできません。

「漁の技術は一度途切れると、次の世代にはつなげられない。だから、我々の世代が、ここで何とかがんばらな」と松本さん。「立ちはだかっている放射能の壁は、計り知れない。でも一度登り始めたんだから、若い人たちのためにも乗り越えていかないと」。

松本さんの夢は、「漁の本格的な再開まで現役の漁師でいること」。あの日の津波を乗り越えた船で、週1回の試験操業に向かいます。



(左)松川浦のノリ養殖も試験的に行われています。



(下)放射性物質の「不検出」が続くタコなどは、道の駅やスーパーでも販売され始めました。